

Vol.4

いつも目が捉えているものは、どこか表面的で部分的で、何かしら、どちらかと言うと捉えようのない。現実と結果が支配する世の中で、量だけが増え質が深まらないような。

人としての成長の瞬間は、いつも突然やってくる。それは、いつだって表面ではなく、また一つの結果でもなく、その人を隅々まで感じているからだったり、また身を寄せる事を大切に思う時だ。

今年はそれにしても、いつにも増して、そうした事を思い出されてしまう。

「深まる」という事はどこか、小恥ずかしく、温もりがあり、手のひらにあるような感覚。

2021年 10月29日 近江楽堂

工藤 煉山

## 1. Prologue

いつものはじまり

## 2. 息観 Sokukan

息をみて

息をみて

その人をみて

自分をみて

姿をみる

## 3. 鑊字 Banji

自分を納める。

その器を自分で作る

作る手には年月がかかる。

納まるにも時間がかかる。

道理は器に納まる事でわかる。

納まりきらない矛盾と共に。

#### 4. 真蹟 Shinseki

送り出す。

心預けた人  
この世で一番、尊敬をした人  
全てを知っている人

心は波打つ

#### 5. 越後三谷 Echigo Sanya

心に響く、言葉、音、感覚。

そうしたものは、遠くに響く鐘や琵琶の音色のようだ。

富士を毎日のように見る時、晴れやかであり、曇りであり、嵐である。

その一つ一つも、また心に響く。

大きく偉大なものでさえ、多くの矛盾をもつ。

その矛盾は美しい。

私達が知る多くの矛盾を知る事は、この世界の理に等しい。

#### 6. 有時 Uji 工藤煉山 作曲

日々は繰り返される。

時が制約され命を渡された時から、それは始まる。

どうすれば、この理から抜け出せるのか。

この苦しみは輪廻として続くのか。

しかし、その小さな枠組みの理もまた、小さな有時でしかなく、

また大きな有時が永遠に続くだけのことである。

#### 7. Epilogue

一つの終焉



LENZAN ART Production